

【提言・提案】

1 ママさぼ ～子育てのひかり構想～

① おっばい都市記念樹

- ・現在の誕生記念植樹の取組みを拡充し、故郷人口を増やす。

《事業概要》

対象：世界中の赤ちゃん（誕生年度に植樹）

場所：冠山総合公園「梅の里」

植樹：梅の木

種類：5種類（枯れるリスクを分散）

本数：5本（全体で5本。1人1本ではない）

参加費：県外者は500円（維持費に充当）

その他：HPに植樹者の名前を掲載し、毎年追加。

記念樹ごとにQRコードを設定し、植樹者を確認できるようにする。

インスタグラム、Twitterで#（ハッシュタグ）をつけて、記念樹の成長を配信し、遠方の植樹者でも確認できるようにする。

- ・記念樹が冠山総合公園にあることにより、自分の記念樹を見に来た人が、周辺の観光をすることにつながる。
- ・「おっばい都市宣言のまち」として子育てに注力していることを発信
- ・光市出身だが誕生記念植樹のことは知らなかった。子どもの成長とともに記念樹の成長の過程を見ることができるとも良いと思う。

② 全国から注目される子育てのまち

- ・少子高齢化の進展により、若者1人で高齢者1人を支える時代が来る一方、格差の世代間の連鎖・拡大が問題である。この格差を解消するため、出生児1人ずつに市が資金を積立て、運用を行い、配当分を20年後に返済不要の奨学金として支給する。

《事業概要》

対象：光市で誕生した赤ちゃん

積立期間：20歳まで

積立額：1人あたり月5,000円 →積立総額：120万円（元本のみ。配当除く）

⇒元本は光市が活用

運用利率：年3.5%（複利） →配当益：約50万円 ⇒返済不要の奨学金

<費用（資産）の試算>出生者数310人/年と仮定

5,000円×310人×12月=1,860万円（1年）⇒20年：3億7,200万円＝市の資産

- ・「おっばい都市宣言のまち」として子育てに注力していることを発信

- ・ 配当で生活する国が実際にある。

### ③ 福祉

#### (1) オプチャ

- ・ 人間関係、地域住民とのつながりに着目した提案
- ・ LINEの新機能「オープンチャット」（1つのテーマについて、不特定多数が雑談できる機能）を活用し、日常的な悩みを住民相互で解決できるようにする。

##### 《事業概要》

方法：LINE「オープンチャット」に光市専用グループを作成

管理者：市職員（グループの作成、管理、監視）

参加者：光市民（※匿名）

テーマ：日常生活の悩み相談、イベントの情報発信

- ・ 参加者（市民）同士の雑談で解決できない場合に限り市職員が雑談に入り、問題解決する。
- ・ 匿名なのでリスクもあるが、匿名だからこそ相談できることもある。相談範囲を指定し、まずは「日常生活の悩み相談」というテーマでスタート。将来的には範囲拡大も。
- ・ 学生、若者の相談に有効（※あいぱーくでインターンシップした際、学生・若者の相談者が少ないと感じた）
- ・ 若者の情報収集源はSNS（HPで調べるよりもSNS）
- ・ 「オープンチャット」は悪用が目立っているため、現在、一部機能で規制が入っている。新機能なのでリスクもあるが、リスクがある分、可能性もある。
- ・ 「オープンチャット」内のトークは記録が残るので、安易に不正等はできない。利用者相互で監視できることが最大のセキュリティ。

#### (2) 学生買い物代行

- ・ 人間関係、地域住民とのつながりに着目した提案
- ・ 小中学校のJRC部等に「高齢者の買い物代行」を依頼する。
- ・ 高齢者支援として成年後見制度や買い物代行があるが、費用が伴うのであまり浸透していない。また、現在、市でもALSOK、マックスバリュ等の事業者と協力して高齢者の見守り活動をしているが、対象が事業者の活動エリアに限られるため、これをカバーする。
- ・ 小学生対象のアンケートで、全国的にも「社会の役に立ちたい」という回答が多い。
- ・ 買い物代行に加え、雑談することで、高齢者と若者の交流ができ、安否確認もできる。
- ・ 職員が高齢者見守りのため訪問する負担を軽減できる。

## 2 KAN光のまちひかり

### ① 「光」バーチャルタウン

- ・ 学生目線で誰でも楽しめるような提案

- ・バーチャル光市に住むバーチャル市民を増やすことにより、リアル光市の交流人口を増やし、地域経済の活性化につなげる。

《バーチャルタウンの概要》

タウン：インターネット上に仮想の光市（バーチャル光市）を作る

住民：リアル世界の世界中の人やペット（※名前に「光」や「HIKARI」がつくことが条件）

→バーチャル光市で住居や仕事を選べる。

→働いたら給与収入もある（バーチャルマネー）

→バーチャルマネーを使ってバーチャル光市で食事、買い物ができる。

→バーチャルタウン広報でリアル光市のイベント情報を発信。バーチャル市民がイベントに参加できるようになる

→伊藤博文など光市の有名人も住んでいる（話もできる）。

課金：バーチャル光市で買い物をしたら、リアル世界でリアル光市の農産物が届く。

→ポイント換算やアップルカード・iTunesカード等でお金を電子化

- ・住民の条件はあるが、その他の人も住めなくても買い物やイベント参加などは可能
- ・バーチャルなので、遠方の人でもバーチャル光市に住める。バーチャル世界でリアル世界と同様に買い物ができ、虹ヶ浜でも遊べる。
- ・「バーチャル市民」と「リアル光市の農家や商店など」をつなぐ運営団体を設置。バーチャル市民が課金し、バーチャル光市で買い物等すると、運営団体を通じてリアル光市の農家や商店に注文が入り、リアル世界の農産物やチケットを送る。
- ・県外から光市にお金が流通し、地域経済や中山間地域の活性化につながる。
- ・バーチャル（仮想空間）なので、やろうと思ったら何でもできる。

## ② 食べ歩き観「光」アプリ

- ・記念樹やバーチャルタウンで増やした交流人口が、実際に光市に来た際にアプリを活用してもらおう
- ・学生目線で誰でも楽しめるような提案
- ・ゲーム機能のある「観光マップアプリ」により、交流人口（光市に立ち寄る人）を増やす。

《事業概要》

マップ：光駅周辺の飲食店、観光スポット

クーポン：飲食店等に設置したQRコードを読み取り、アプリ利用者限定クーポンをゲット。ゲーム機能とも連携。

→アプリ内GPS機能と連携し、QRコードがある場所でないとコードを読み取れないようにすることで不正アクセスを防止するとともに、実際にその場所を訪れることにつながる。

→クーポンをランダムにすることで複数の場所に行くことにつながる

ともに、QRコードの不正拡散を防止

ゲーム機能：飲食店等に設置したQRコードを読み取る→敵が出現→敵を倒したら、  
ときどきクーポンをゲット

<ゲーム案>

「影武者 伊藤博文撃破で 7つの光探し」

→伊藤博文と虹ヶ浜の虹（7色）をかけたもの

7人（7色）の伊藤博文（偽者6、本物1）が出現し、偽者を倒して本物を守る。

掲示板機能：利用者が匿名で書き込める。食後の感想などのコメント、地元人のコメント、お店がおススメ商品を紹介⇒これを見て訪れる人が増える

その他：イベント情報も見ることができる。

参加方法：光駅に掲示するポスターのQRコードを読み取り、アプリをインストール

- ・マップをアプリにすることにより、スタンプラリー用紙が不要（紛失の回避、参加者への送付が不要）。また、スマホがあれば誰でも参加できる。
- ・ゲームなので子どもでも楽しめる。親子で飲食店・観光地を巡れることにつながる。
- ・光駅周辺には飲食店が多いので、光駅周辺でスタート。その後、他のエリアにも広げる。
- ・市長を隠れキャラとして登場させることもできる。市長が実際に参加したイベント会場に利用者が行くことにより、ポイントを獲得できるなど、イベントへの誘い込みもできる。

### ③ 市民参加型イベント

#### (1) 虹ヶ浜をイルミネーションで埋めつくせ

- ・光市の認知度を向上させる
- ・若者に定着している「インスタ映え」を活用し、虹ヶ浜のイルミネーションを広める
- ・SNSを活用することで多くの人に知ってもらえる
- ・費用は市民や企業が出資（神社の鳥居の奉納のように）。イルミネーション1個2,000円  
→松林の保全費にも充当し、景観保全  
→出資者の名前をイルミネーションに記載  
→島田川河口側から設置し、出資で増やしていく
- ・イルミネーションの電源は太陽光パネル（管理負担、光熱費の軽減）
- ・『食べ歩き観「光」アプリ』との連携による相乗効果を狙う。

#### (2) 灯籠流し

- ・光市の認知度を向上させる
- ・島田川を利用
- ・灯籠は自然由来の素材で製作（環境に配慮）
- ・幼児や小学生が参加し、オリジナルイラスト、願い事を入れて流す。  
→親も同伴するので参加者が増える。